



逆

アサブル
恋人生活♡

うづりうづり♡ドスゲブー♡

ふたなりお嬢様とメスシヨタ生徒会長の

目次♥

第一話	僕の彼女はふたなりお嬢様♥	3
第二話	二人の秘密♥	12
第三話	ケツマンコ初体験♥ 童貞の佯処女喪失♥	20
第四話	愛情とえっちたっぷり手作り弁当♥	29
第五話	女装メイドとふたなりお嬢様♥	36
第六話	夏休みドスケベ水着ふたなりっここに 孕ませられ無人島ツアー♥	48
第七話	がんばれ♥ がんばれ♥ 逆アナル♥	57
閑話	明るい家族計画♥	72
第八話	えっちなホワイトクリスマス♥	77
最終話	メス堕ち逆アナルマリアージュ♥	86
おまけ♥		98

第一話 僕の彼女はふたなりお嬢様♥

桔梗院マイカ。

身長 160 cm、バストのサイズは 100 cm 越え、金髪ツインテールの凄い美人。

明治時代から続く日本有数の財閥、キキョウグループの一人娘、広大な面積を持つお屋敷はメイドや執事が居るらしい、絵に描いたような超お嬢様。英語が得意で、将来の夢は海外に出てお仕事する事。

学業優秀、スポーツも万能、男女誰にも分け隔て無く接する、学園の有名人、なんだけど、

そんな彼女の秘密はというと。

「あ♥ あ♥ ユナ君のお口、やっぱり気持ちいい♥」

「んぐ♥ ふぐう♥」

「飲んで♥ 飲んで♥ マイカの子種♥ 超高貴な血筋から生産されたロイヤルキングタマミルク、いっぱいご賞味してえ♥」

「ん、んんんううううう♥♥♥」

じゅじゅじゅ♥♥♥ ぽぽぽ♥♥♥ じゅじゅじゅ♥♥♥

僕みたいな男に……♥ ザーメンいっぱいご馳走するのが大好きな、ド変態ふたなりお嬢様だって事♥

「ん、くうううう♥ お、でりゆでりゆう♥ 彼氏のお口におちんぽマラ汁いくらで

もどっぴゅんできるう♥ 無限供給はじまつちゃう♥ インフニテイミルきゅウ♥」

あ、凄い、濃すぎてゆっくり口の中に溢れてくる♥ 口の粘膜に精液染み込んでく

る♥ あ……ダメ……♥ こんな味わったら♥

……あっ、あああっ♥

ぽぽぽ♥♥♥ ぽぽぽ♥♥♥ ぽぽぽ♥♥♥

「ああ！ ああああ！♥」

ま、また射精しちゃった、精液飲んだだけでびゆるびゆる童貞チンポから射精♥

「ユナ君の変態♥ 変態♥ マイカのザーメン飲んだだけで射精なんて♥」

お互い射精しきったあと、チンポを口から離す。カリ高で亀頭がパンパンで、金玉もふっくら艶やかなおチンポをうっとり眺めなら、僕はまた、自分の童貞の、彼女より一回り小さいおちんぽからびゆるびゆる射精する♥ その様子を、ガン見して興奮するマイカさん。

「ちょ、ちょっとエロ過ぎる♥ 男としてダメ過ぎる♥ なんなのかしらユナ君おちんぽ汁でおちんぽびゅっぴゅんなんて、男としてどうなのよ♥」

「そ、そんな事言われても、だって……」

思わず目をそらして、顔を赤くして、

「……マイカさんの事、大好きだから」

「~~~~~♥♥♥」

「え、うわ！」

ま、マイカさんが僕に抱きついてきて、あ、キスされちゃう……♥

じゆる、じゆるう、ってえ♥ 舌を絡めて、口の中の濃厚なザーメンをしゃぶりあうような、スケベなキス♥ 頭が蕩けてくる♥

口を離すと、唾液、じゃなくてザーメンのかけはしが出来ちゃってる。お互い息を弾ませるけど、おかげで、お互いスケベな匂いいっぱい嗅いじやって、……おちんぽたつてきちゃう。

「うう~~~~~♥ ユナ君、可愛い……、普段は色んな女の子にチョツカイかけられる女顔のイケメンなのに」

「か、かわいいのかなあ……♥」

「かわいいわよ！ 女の子みたいな甘いマスクで、モデルみたいにスラっとしてて文武両道、生徒会長の仕事も完璧にこなす、どこに出しても恥ずかしくない男の子なのに、……チンポの前だとすぐ可愛くなるんだからあ♥」

好き♥ 好き♥ って言いながら、ほっぺたにキスして来る♥ ああ、こうやってだっこしあってるだけで幸せ……♥

幸せ……だけど……♥

キョウキョウキョウキョウ♥

「んひんほおお！？♥ ユ、ユナ君ダメよ♥ 不意打ち金玉モミモミはだめえ♥」
「さっきから意地悪な事言うから、お返し……♥」

金玉を握って、主導権も握っちゃう♥ 指の間からエロ肉がはみでちゃうんじゃないかってくらい、強めに♥ 勿論、本当に潰しちゃわないよう、気持ちよく感じるギリギリの力加減で♥

「本当金玉よわわなんだから……♥ ほらほら、男にメス金玉手玉にとられて恥ずかしくないの？♥」

「恥ずかしい、恥ずかしいです♥ 日本有数の財閥キキョウインググループのお嬢様でありながら、彼氏にキンタマ握られちゃっただけで服従しちゃうマゾフタナリメスで申し訳ありません♥」

「うんうん、それじゃ手、離してあげるね♥」

「や、やだやだやだっ♥ もっとマイカのキンタマ舐けて、調教してっ♥ お高くとまったお嬢様を、ユナ君専用のタミルクサーバーに奴隷堕ちさせてえ♥♥♥」

「ミ、ミルクサーバー……♥」

ああダメ、そんな事言われたら♥

ハッ♥

「おお♥ おおほお♥ またまたおフェラ……♥♥♥ キンタママッサージしながらのぬっぽぬっぽおフェラ……♥ しゅきい、だいしゅきい♥♥♥ 男の子にしか出来ない力強い吸引力♥ 確かな実績♥ 確かなパフォーマンス♥ ひよっところ口で吸い付いて、お口の中で舌がフル活用♥ あ♥ おっほ♥ チンポの輪郭全部リサーチしてくる♥」

きんたまにくを両方の手でぎゅうぎゅう握りながらのフェラチオ♥ 口の中に溢れる先汁の量がおかしい♥ おいしい♥

「ぶはっ♥ い、いいの、マイカさん♥ ミルクサーバーになっていいの♥ 僕、二十四時間ちんぽに吸い付いちゃうよ……♥ 僕個人の何時でも24時間ザーメンド

「んひいいいいいい！？」 ほ、本気フェラきたあ！？」
「ぢゅるっ♥ ぢゅるるっ♥ ずぞぞっ♥ ぢゅぶっ♥」



「あ……へああ……♥ そ、そんな、美味しそうに、しゃぶってえ〜♥ お、お、お
おおおおおっ！♥」

マイカさんのおちんぽ美味しい……♥ いくらでもしゃぶれちゃう……♥
もっど、もっどお……！♥

「ああああ！♥ ひゃあ♥ お、し、幸せなの〜♥ かわいい彼氏にドスケベおちんぽしゃぶってもらって幸せしゅぎるのぉ〜♥」

その言葉に、僕は一度口を離した♥

「だったら射精して♥ ううん、射精せ！♥ エッロいスケベザーメン僕にゴクゴクさせるの♥」

そう言うってからまたおちんぽをしゃぶる♥ じゅっぽじゅっぽ大好きな人のおちんぽしゃぶりまくる♥

「あああ〜〜！！♥♥♥ おねだりでなく命令形！♥ ちんぽ強請りの酷い人お〜♥♥♥ 搾取されるう♥ チンポミルク強奪犯に、マイカのスケベザーメンご馳走しちゃう！♥ お♥♥♥ でで射精するだダメお♥♥♥ あ♥」

マイカさんは舌を突き出して、ついに♥

「お お お お お お お お お お お お お お！！！！♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」
「ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん ん！！！！♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「はあ……はあ……はあ……」♥

「……お、お粗末様でしたわ……」♥ 強引フェラ、凄い良かった……♥

「だ、大丈夫？ 無理させちゃった……？」♥

「全然平気、ふふ、うふふ♥」

そのまま僕を抱きしめて、ほっぺたにほっぺた、ちんぽにはちんぽ、きんたまにはきんたまを、擦りつけてくる♥

「はあ……好き……♥ ……私の精液、ザーメン、タンパク質になって、ユナ君の栄養として摂取されて、体の一部になっちゃうのよね……♥」

「そのセリフ何度も聞くけど、そういうの、好きなの？」

「好き♥ 大好き♥ 自分のおちんぽ汁がかっこかわいいユナ君の一部になるのすごい変態的だし、な、なんか愛が伝わっている気もするのよ♥ ……ユナ君はいやかしら？」

「い、いやじゃないかも……♥ 自分の細胞が、マイカさんの精液で生産される。それって、二十四時間マイカさんにザーメン漬けにされてるって事だよ？ いつでもマイカさんを身近に感じられて嬉しい……♥」

「え、え、えええ……♥♥♥」

「顔、赤いよ、マイカさん？」

「ユ、ユナ君のセリフが変態過ぎる所為よ！ ……うう、彼氏として全部揃った優良物件生徒会長なのに、こんなちんぽこ娘と付き合ってくれてるのは、本当、夢みたい……♥」

「それはこっちの台詞だけ……♥」

そう、本当に夢みたい。

女の子にはモテたけど、女の子のチンポが好き、なんて性癖の所為で、まともに女の子と恋愛なんか出来なかったのに、マイカさんと出会った事で、夢みたいな生活が始まった。

……あ、お、思い出したら……♥

「……ユナ君、もしかして、お尻疼いちゃってるのかしら？」

「う、うん……♥ ……あの日の事思い出したら♥」

「あの日……♥」

僕のに当たってるマイカさんのおちんぽが、ビクン、と跳ねた♥ 僕はマイカさん

から体を離して、あの日みたいに、仰向けに転がって、くばあつとオスマンコを彼女のチンポに晒して……♥

「キンタマミルク強盗してすいませんでした……♥ 今度は……僕のおしりまんこ……マ、マイカさんのおちんぽでえ……奪ってください……♥」

僕がそうおねだりしたら♥

「好きー……っ!♥」

「んっ!♥ ん、んう~~~~っ!♥♥♥」

マイカさんは、僕に飛びついて、

キスをしながら僕のお尻におちんぽを……♥

第二話 一人の秘密♥

これはマイカさんと僕が、結ばれた時の話。

結ばれるというのは、えっと、色んな意味で……♥ 具体的には、お尻におちんぽを……♥

んんっ！

ともかくある日の昼休み。その前日風邪で休んだ桔梗院さんに、同じクラスの僕が隣で、ノートを見せてあげていると。

「マイカさんとユナって付き合ってるのか？」

「え？」

「え？」

僕の友達に、突然そんな事を言われて、二人して驚いた。

僕の顔も、……桔梗院さんの顔も真っ赤になる。

「あ、私も気になってた。マイカ、ユナ君の話すっごいしてるよね」

桔梗院さんの友達も会話に参加してきた。どんどん人が集まってくる。

「い、いきなり何なの！？ 葉月君と私、そんな関係じゃないわよ」

「でも、今も仲良くしてたし」

「これは、午後からの授業の復習、手伝ってもらってただけ！ ……は、葉月君に失礼でしょ？ 私なんかじゃ釣り合わない」

「いや多分、この学園で、マイカさんに釣り合うのユナくらいだと思う」

「葉月君に釣り合うのもマイカだけよ、それぞれのファンには申し訳ないけど」

この学園で僕達それぞれが、そういう目で見られているのは知っている。

だけど、僕達二人が付き合ってるのか、そんな事言われるなんて思わなかった。

「え、え〜と〜……」

真っ赤な顔で、桔梗院さんが僕の事を見てくる。

……なんとかひた隠しにしてるけど、僕は桔梗院マイカさんの事が好きだ。学園で一番有名人。見た目は勿論だけど、性格そのものが優しくて、話してるだけでとても楽しい。財閥のお嬢様なのに、僕にも自然と話しかけてくれる。出来るなら本当に付き合いたい。

……でも僕には、彼女と付き合えない理由がある。……どうしても人に言えない理由。

「あ……あの僕は……」

桔梗院さんの方をチラっと見た。

「桔梗院さんは素敵な女性だと思ってる、だけど、付き合ってるのかそんなんじゃ」

「いいじゃん、折角だから付き合っちゃえよ」

「ご、ごめん、僕」

そこで僕は顔を伏せた。

「女の子と付き合えない理由があるから……」

「え……」

……言うかどうか迷ったけど、思い切って言った。

「そ、そうか」

「い、家の事情？ ……ご、ごめん、なんでもないよ、言わなくていいから」

僕の言葉に、クラスメイトもそれ以上は聞かなかった。皆、優しい。

……付き合えない理由。

それがなんなのか、誰にも、特に桔梗院さんには絶対言えない。

僕が桔梗院さんと付き合えない理由。

それは……。



う。

付き合いたい、桔梗院さんと。でも、僕は本当は王子様でもなんでもない。勝手に桔梗院さんに妄想の中でちんぽ生やして、男なのにおっぱい弄ってイっちゃう、ふたなりちんぽ好きの男だから……。

イかなかったけど勃起してる自分のちんぽを制服の上からまさぐる。男なんだから、こっちでいく事を考えなきゃいけないのに。

でも僕は、入れるよりも入れられたい……。

「……ごめんなさい、桔梗院さん」

オナニーが気持ちいいのは達するまで。僕は虚しい気持ちで後始末を始めた。

……本当はアナニーまでするつもりだったけど、今日の桔梗院さんの顔がチラついて、学校では集中出来そうになかった。



「ん~~~~」

後片付けした後は、生徒会の仕事を一人で終わらせて、僕は学校の玄関まで向かう。

……生徒会室であんな事するのはダメなのは解ってるんだけど、スリルが気持ちよくて今でもやめられない。

結構ストレスたまってるから、どうしても……。

(……折角エッチな同人誌も持ってきたのに)

おかずにしようと思っていた同人誌のタイトルは、

〈逆アナル転生♥ 勇者になったはずの俺が異世界でふたなり姫様の女装肉便器になるなんて♥〉

学校に何を持ち込んでるんだ！ って怒られそうだけど、この同人誌は凄い。

だって、掘る方のヒロインが、桔梗院さんに凄く似てるから。

……あと、主人公もちょっとだけ僕に似ている。気がする。

かけてから、机の上の同人誌に向き直った
早くこれ、かばんに入れて持ってかえらないと、
……。

「……駄目、我慢出来ない」

僕は、制服のストレッチパンツを脱ぐ。男なのに全然毛が生えてこないし、お尻も
なんだか大きめな、男らしくない下半身を外に出す。……生徒会長室で下半身露出、
これだけで興奮してきちゃう♥
ポケットの中に手を伸ばす。
化粧水入れにいれて持ってってきた、ローションを指にたっぷり絡ませてから、僕は

クキョ♥

「……あ♥」

思わず声が漏れた♥ ずっとずっとお尻を弄り続けた所為で、腸液が愛液みたいにし
しみ出るようになった変態アナル♥

漫画みたいに、ローションを使わなくても、お尻弄れるようにそのうちなるのかな
あ♥

そんな事思いながら、自分のお尻を弄っていく♥

僕、逆アナル同人誌で、お尻オナニーしてる♥ 学校で生徒会長が絶対しちゃいけ
ない事してる♥

「ん……んう……んう~~~~」

ふわあ……♥ アナニー好き♥ 女の子みたいな気分になれて好き♥ 成績優秀ス
ポーツ万能な生徒会長が、学校で逆アナル同人誌でアナニーしてまあす♥

こんなの大好きな人には見せられないよお♥ でも見られたらもつと興奮しちゃう
かも……♥

ご、ごめんなさい桔梗院さん……♥ 僕変態なんだ……♥ ど、どうしよお♥ 大
好きな桔梗院さんに、学校でアナニーしてる変態だつてバレたらあ♥

桔梗院さん、桔梗院さん♥

「……す……好きい♥」

だめえ……心の声漏れちゃう……♥

「桔梗院さん……大好きい……♥」

桔梗院さんの名前を呼んで……僕は……♥

「桔梗院さんのおちんぽ……いれてえ……!♥」

勝手におちんぽ生やして、アナニーしてる♥

ぬちゅいっ♥

あ、ああ♥♥ やっぱりエッチだよこの同人誌い♥ くちゅくちゅアナニーサウン

ドしまくりい♥♥ 好きい♥♥♥

「はあ、はあ、はあ♥」

おしりほじほじする指が止まらないよ♥ 大好きな女の子にちんぽ生えるのを想像して、お尻アナニー大好きなの もう我慢出来ない、すぐイっちゃう♥

「イ……イキそうだよ……種付けして、赤ちゃん孕ませてえ……」

僕がそう言ったら、妄想の中の桔梗院さんが、

いいよ♥ っつて、言ってくれて……♥

あ、ああああああ♥

「いく……! あ、あああああっ!♥♥♥」

じゅーんじゅーんじゅーんじゅーんじゅーんじゅーん♥

メ、メスイキい♥♥♥ メスイキ開始♥ 生徒会長室で生徒会長が肛門で女の子になるのおおお♥♥♥

僕の体暴れちゃう♥ 射精と違ってずーっとな気持ちいいが続くから、お尻いじめればいじめる程気持ちよくなる♥ 凄い凄い♥ 夢中になっちゃう♥

(桔梗院……さあん……♥)

僕はうっとりとしながら、心の中で彼女の名を呼んだ。

……そしたら、

ガタンッ!

「……え?」

「……あ」

……後ろで何か、倒れる音がした。

振り返ったらそこには、桔梗院さんが居た。

彼女はスカートからでかすぎる勃起チンポを晒して、射精したザーメンで水だまりを作っていた。

少しの沈黙の後に、

『……わああああああああつ!』

二人の絶叫が、生徒会長室に木霊した。

第二話 ケツマンコ初体験♥ 童貞の処女喪失♥

翌日の土曜日。

僕は、桔梗院さんを自分の部屋に招いていた。

僕の家族は明日まで出かけていて、大好きな人と一つ屋根の下という状況だ。

ずっとずっと緊張している、そして、

僕のお尻も緊張、というかうずうずしっぱなしだった。

「はあ……はあ……♥ 葉月君のお尻……♥」

「は、恥ずかしいよ、桔梗院さん……」

今がどういう状況かというと、僕はベッドに、桔梗院さんは床に座っている。

仰向けで足を拡げてお尻の下に枕をおいて、ちっちゃなおちんぽの形をしたバイブを、お尻の穴にハマてもらってる。

昨日、僕達は、お互いの気持ちを確かめ合った。

僕が桔梗院さんが好きだった事と、ふたなりちんぽが好きで彼氏になる事を諦めていた事。

そして、桔梗院さんも僕を好きだった事と、ふたなりが原因で彼女になる事を諦めていた事。

エロ同人だったら、そこからなくずしにセックスという流れになりそうだけど、僕達は全く気持ちを整理出来なかった。だから、一度お互い家に帰る事にした。

嬉しさよりも驚きの方が凄かったから。

……だけど、昨日の夜は。

「ずっと……♥ ずっとおちんぽ勃起させていたんだから♥ 葉月君が私の事好きって知って、嬉しかったから♥ でも、射精は我慢したのよ♥ 少しでも多く、葉月君の中に中出ししたかったから……♥」

「ぼ……僕も……桔梗院さんの事想像してずっとアナニーしてた……♥」

「う、嬉しい……♥」

大好きな人が、ふたなりだったなんて、凄い奇跡……♥

嬉しくて涙が滲んで、お尻からローションを上塗りするようにえっちな汁が溢れちゃう……♥

「で、でも、いいの？ 桔梗院さんの童貞もらっちゃっていいの？ 男の相手に、

それも、処女のまま……」

「いい、いい♥ 葉月君の処女もらえるなら、一生処女で構わないわ♥ は、葉月君こそ、男の子なのに……」

「ほ、僕も、……一生童貞でいいから、処女奪って欲しい♥ ……桔梗院さんの精液便所になりたい♥」

「~~~~~っ♥♥♥」

突然桔梗院さんが、ベッドの上の僕に飛びかかった♥

「ひゃあっ♥」

そのまま唇を奪われる♥ 舌を絡ませて、二人でエロエロなディープキス♥ ファー
ーストキスなのに最初から下品♥ 僕よりおっきなおちんぼが、僕のおちんちに擦りつけられる♥♥

「好き♥ 好き♥ ずっと好きだったあ♥ 優しくしてくれるのが嬉しくて、いつもおちんぼ勃起させてた♥」

「ぼ、僕も、桔梗院さんがふたなりだったらって、お尻の穴いつもうずかせて♥ ……んっ♥」

ズボンッ

「え、ええええええ~~~~~♥♥♥」

お尻をいきんで、お尻の力だけでおちんぼディルド外に出す♥ アナルの中を空気が触れるけど、それがゆっくり閉じて、いつものうずうずお尻まんこ♥ トイレの時もちよつと大変なお尻に♥

キスをやめて、桔梗院さんはまた僕のお尻を見て、……目を見開いて興奮してる♥ 男の僕のお尻で、おちんちんが勃起してると思うと凄く嬉しくなっちゃう♥

「ほ、本当はお尻って、一ヶ月くらい開発しないと気持ちよくないはずよ♥ どれだけ一人で遊んできたの♥」

「い……言わないで♥ いじめないで♥」

「学校では真面目な生徒会長の癖に、お尻は不良過ぎるなんて~~~~♥」

桔梗院さんは立ち上がって、シャツのボタンを外して、ぶるんばるん♥ って、おっぱいを外に出した♥ 本当お尻のようにおっきなおっぱい♥ 見ちゃダメなのに、目を外せない♥ おっきなおっぱいとおっきなおちんぽ……♥

そのまま桔梗院さんはおちんぽを、僕のお尻おまんこに擦りつける♥ もう擦られるだけでイキそうになっちゃう♥ 駄目、これ、いれられた瞬間アクメしちゃうよお……♥

「は……葉月君……いれちゃうわよ……♥ 私童貞もらって……♥」

「……あ、あの、桔梗院さん」

「……どうしたの？」

顔を赤くして、目を反らしたけど、勇気を出して向き直して両手を拡げて、だらしない顔で僕は言った。

「……ユナ君って、名前で呼んで欲しいです♥」

「~~~~~」

凄く恥ずかしい事を言った僕に、桔梗院さんは、

「ユナ君っ♥♥♥♥♥」

名前を呼んでくれながら、思いつきりちんぽをケツマンコにぶちこんできた!!!

ズニユウ!

な、何これ、ケツマンコにいれられるって、これだけ気持ちいいの♥ 僕のお尻雑魚すぎだよお♥ お尻まんこがゴクゴクって、ザー汁ゴクゴク飲みまくって♥

「あ♥ んひ♥ ん、ああああっ♥ んひいい♥」

メ、メスイキとまんない……♥ 体がきもちいいだけじゃない♥ 頭が幸せすぎるよお……♥ 脳イキとまんない……♥

「しゅ、しゅごい♥ おちんぼしゅごい♥ 処女けつまんこに童貞ちんぼはめられるのしゅごすぎい……♥」

女の子みたい声が勝手に出て、おバカなセリフも溢れちゃう♥ 全然、生徒会長の凜々しさなんかない♥ こんなエロ声出しちゃってたら、皆からメス認定されちゃう

♥ か、神様はなんでえ♥ 男の子の体をこんな風に作ったの♥ お尻にちんぼいれられて喜ぶようにしたの♥ かわいくてもかっきよくても、こんな、ちんぼで喜ぶ前立腺スイッチ標準搭載するなんてえ!♥

……ううん、多分僕が変態なんだ♥ 生まれた時からおちんぼ中毒なんだ♥ メスイキで震えちゃってる僕、……そしたら桔梗院さんはおっきなおっぱいを擦りつけながら抱きしめてきた♥

「このままじっとしてあげるわ……♥」

「あ……ふあ……♥」

「大丈夫……私のおちんぼは逃げないから……♥ ユナ君がぼこされたくなったら、いつでも腰動かしてあげるから……♥」

「~~~~~っ♥♥♥」

僕は無言で、甘えるように桔梗院さんを抱きしめる♥

暫くして、体が落ち着いたから、僕の方から軽く腰を揺する……♥

「ぼ……僕、こんな変態だから……お尻におちんぼが欲しい淫乱だから……♥ 桔梗院さんと幸せになんて絶対なれないって思ってたから♥」

「うん♥ うん♥」

「本当は、生徒会長の仕事も大変で……♥ 毎日不安いっぱい……♥ それをこまかすようにお尻でオナニーしてたから♥」

「そうなの♥ 大丈夫♥ これからは私がユナ君のお尻毎日パコパコしてあげる♥」

「い……いいの……？ 本当に……？」

「本当に♥ ……と、というか、私だってユナ君と同じくらい変態だった訳だし、お互い様よ♥」

「……桔梗院さん」

「……マイカって呼んでくれる？」

「……マ、マイカさん♥」

「なくに♥」

「お尻セックスして……♥ 赤ちゃん出来ちゃうまで種付けして……♥」
♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥

マイカさんは大喜びで、僕のケツマンコに腰を振り始める♥

「「ひゃんっ」」

前後で♥ たんたん♥ お尻の穴のえっちなわっかで、おちんぼの太さや形をスキヤンしちゃう♥ お尻の快感がソナーになってる♥

「あん♥ ああん♥ お尻凄いい♥ 童貞男の子のお尻すごいいい♥ おっほお♥」
「ひゃあああ♥ ど、童貞なのに僕、童貞ちんぽでファックされて♥♥♥ エ、エロすぎるよお♥」

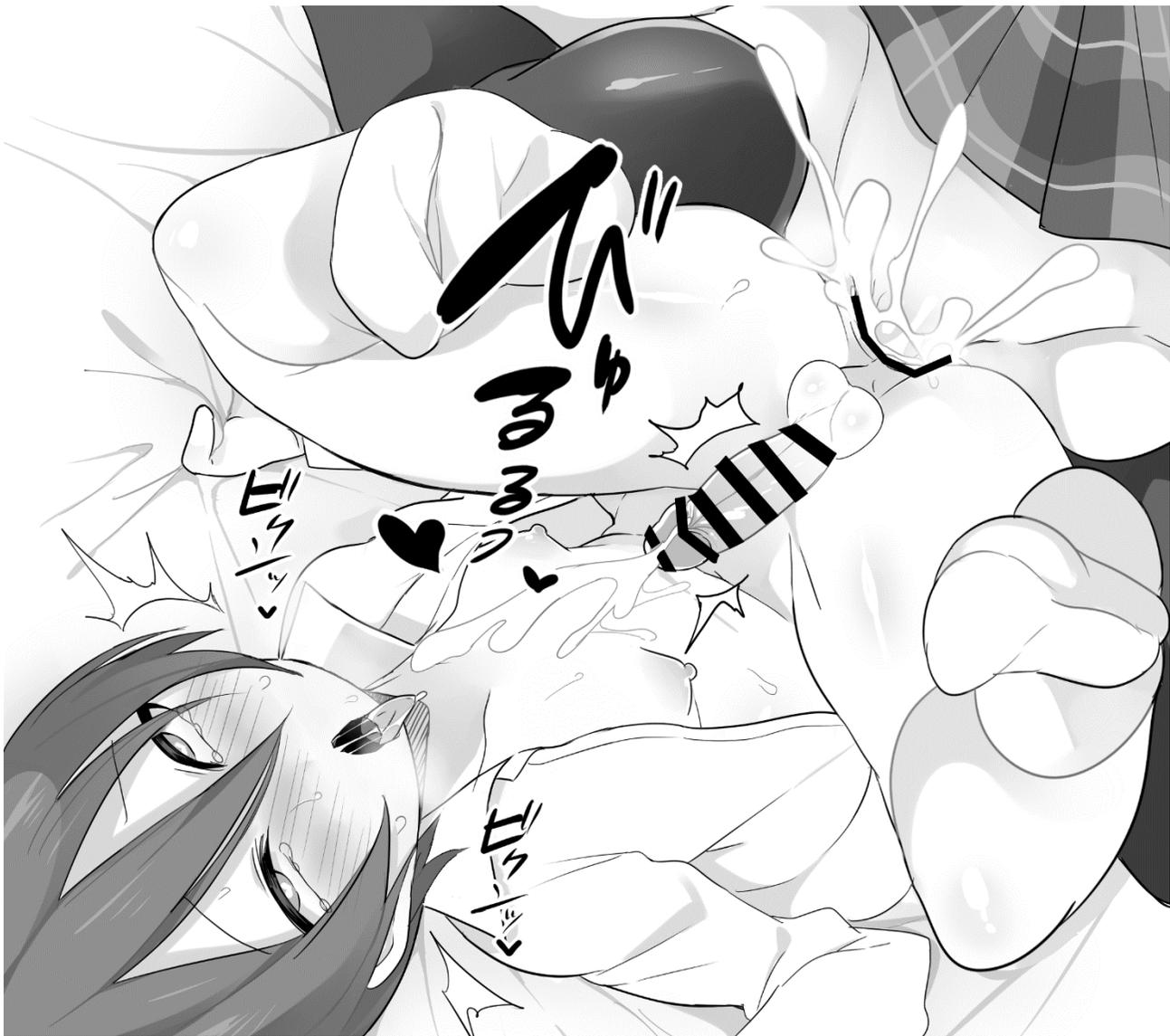
ひゃあ♥ おっきなおちんぽ、お尻の中かきまわしてくる♥
前立腺を狙ってきてる、そこを擦るように腰をあげて、ゴリゴリ♥ って刺激される♥ ビリビリ来るような感覚に、あひい♥ ってえっちな声漏れちゃうし、先走りも漏れちゃう♥ 学園のお嬢様が僕のお尻で涎垂らして感じながらドスケベ逆アナル♥ 凄いい、エッチい……♥♥♥

「きもちいいわあ……♥ ユナ君のおまんこ最高よお……♥」

「マ、マイカさんのおちんちんも♥ ひゃあっ♥」

「はあ♥ 駄目♥ こんなもたない♥ い、いきそう♥ 中毒なる♥ 桔梗院家の跡取り娘が、男の子のオスマンコ中毒になっちゃうううう♥ んほお♥ んひ♥ スキャンダル決定♥ ふたなりちんぽ令嬢と生徒会長の秘密の逆アナル恋愛♥ 記者会見で公開セックスしちゃう~~~~♥」

ズキユニーー グキユニーー ムキユニーー グプニーー グキユーー ニキユニーー



ひゃああああああっ♥
 中出し♥
 精液きた♥
 ア、ア、ア、ア♥
 しゆる♥
 んほお

「ひゃああああああっ♥
おほおほ」

「にやあああ♥ 注ぐ♥ 注いじゃう♥ 男の子孕ませるくらいこくまうメスチンポ

汁直腸に生きてたままお届けえええ♥ おほおほおほおほ」

おちんぽからお尻にいっぱい注がれる♥ 金玉から無限に出てきそうなザーメンを、僕のケツ穴は勝手にごきゅごきゅ飲み干していく♥
き、気持ちいい……♥ メスチンポとのセックス♥

「ひゃあ、ひゃああああ……♥ ……♥
「はひ、んひ……♥ おお…… ああ……♥」

……しちゃった♥ 大好きな人とのラブラブ逆アナルセックス……♥
夢みたい……♥

「マイカ……しゃあん……♥」
「えへ……えへへへ……♥」

うつとりしながらマイカさんの名前を呼んだら、マイカさんはにこって笑ってくれた。その慈愛に溢れた顔を近づけて、マイカさんは僕にまたキスをしてくれた♥
この日から、僕達は、学園を代表するカップルになって、
……そして裏では、ド変態逆アナル恋人として結ばれて……♥

る♥ 僕は、マイカさんのおつきな金玉に顔を埋めてしまう♥ 金玉の弾力と、むわつとした蒸れた香りを、顔中で感じていたら、

「……あ、あの、ユナ君。一つお願いがあるのよ」

「……お願い？」

そんな事を言ってきた。なんだろう？ 金玉とおちんぽにほおずりしながら、マイカさんを見上げる。顔を赤くして、モジモジしている。けど、口を開いて言ってきた。

「こ……今週の金曜日ね……私が作ったお弁当食べて欲しいんだけど……」

「……え？ 手作りお弁当？ ……お願いも何も、そんなの、僕からお願いたいくらいだけ」

恋人が作ってくれたお弁当なんて、どんな豪華な料理よりも美味しさに決まってるし。

「え……ええとでも……あの……」

「……マイカさん？」

なんで、お弁当を食べて貰う事に、こんな恥ずかしがっているんだろう。

(もしかしたら、凄い料理が下手だとか？)

そんな僕の予想は、次の言葉で、一気に砕かれた。

「私の……！ ザーメンで出来たお弁当を食べて欲しいのよ……！」

「……へ？」

マイカさんの言葉を理解するのに、僕は暫く時間がかかった。



りよ、料理風景、撮影してきたの？ う、うん見るけど。

……マイカさんの、丸一日オナ禁おちんぽ。

ご……ごめん、料理の為に射精しなかったんだよね？ 僕もだから、お尻弄るのも我慢したけど。

ゆ……夢だったの？ こんなスケベな料理作るの。えっと、引くかどうかと言われたら、その……。あ、おにぎり、おにぎりは僕も好きだよ、シヤケが一番好きかな。

オムレツも美味しそう、あ、卵割るのうまい。マイカさん、料理上手だね、って、あ……♥

ちよ、ちよっと待って、おちんぽ、オナ禁してキンタマどころかおちんぽそのものがパンパンになってるおちんぽ、いきなりそんなアップで映されたら♥

うわ、ほ……本当にそれで、卵かき混ぜるんだ、先走りがとろとろって入っちゃってるよ……♥

ひゃ……、射精すの、本当に？ 精液卵の中に……あ、う、うわあ！

……うう、卵よりザーメンの方が多い。色が卵の色じゃなくなってる。

わ、や、焼いてる……ザーメン入りオムレツ、本当に作っちゃってる。

う……嘘、これだけじゃないの、え、……ええ。



お昼休み、学校の屋上、誰も入ってこられないように鍵をかけた状態で、スマホでマイカさんの料理風景を見た僕は、

「はつきり言って頭おかしい」

「ええー！」

正直な気持ちをマイカさんに伝えた。

「なんで！ なんでよ！ ユナ君いつも私のおちんぽ汁美味しそうに飲んでくれているじゃない！」

「それとこれとは話が別だよ！？ りよ、料理で食べるのは、なんか違うというか……。精液はおちんぽとセットじゃないと寂しいというか……」

「ひ……酷いわ……、一生懸命作ってきたのに……！」

まさか、恋人になって初めての喧嘩が、食ザーをするかどうかになるなんて。

……まあでも、僕の答えは決まっていた。

「……食べるよ」

「……え？」

「早起きして作ってきてくれたんだし……それでマイカさんが喜ぶなら……。……の、残しちゃったら、ごめんね」

「!♥」

マイカさんは、ツインテールが踊り出しそうなくらい、喜んだ顔をした。そしてすぐさま、レジャーシートをひろげ、二段重ねのお弁当箱を開き、オムレツ、ハンバーグ、サラダといった、彩り豊かなお弁当を出した。……見た目は凄く美味しそうだけど、この料理に全部ザーメンが隠し味として含まれてる事を、僕は知っている。ごくんと生唾を飲んだ。妙な緊張感が僕の中でいっぱいになる。

「そ、それじゃいただきます。……って!？」

マイカさん、当然のようにおちんぼを取り出して!? 膝立ちになってお弁当におちんぼ扱いて……!

め、目の前でそんな、ドスケベセンズリ見せられたら、興奮しちゃう……。でもなんで急に。

「ま……待って、ユナ君♥ 最後の仕上げに……。ぶっかけるの……。♥ 私のチンポミルク♥」

「え……嘘……」

ま、まだかけるの、お弁当に? そんな……。

「ああん♥」

♡♡♡♡♡

僕の目の前で、美味しそうなお弁当に、たっぷり白濁液がかけられる。それを見て、最早笑うしかない僕に、マイカさんはにこっと微笑みながら、僕の後ろに回って、

「ひゃっ!？」

突然、僕のパンツをずらして、お尻を丸出しにした。

「……ごはん中、椅子になってあげるわ♥ おちんぽ無しだと寂しいんですよ♥」
「……うん……うん♥」

前後にぴこぴこ揺れるマイカさんのおちんぽを、お尻の谷間で挟んで固定して、ゆつくり、座り始める♥

「んほお♥ ひゃあああああ〜〜♥」

ずぶずぶとお尻に入ってくるおちんぽ……♥

お、お尻の穴で、ちんぽくわえるの大好き……♥ 気持ちいいし、安心する……♥
昨日ずつとお尻が寂しかったから、おちんぽがあると凄い安心しちゃう……♥

「ふふ♥ 座り心地はいかがかしら♥」

「さ……最高……♥ 大好き……♥」

ああ、さっきまでの緊張がなくなっちゃう♥ ちんぽで僕の脳幸せホルモンどばどばは出てる……♥

「それじゃ♥ このまま召し上がって♥」

促されるまま、ちんぽをハメられたまま♥ 僕はまず、最初にオムレツに箸をつける。どろっとしたザーメンがかかったそれを口に入れて、噛みしめる。卵の甘い香りに、バターの香ばしさ、とつても美味しい。

とつても美味しいのに噛めば噛むほど、しちやいけない味がしみ出してくる♥ 生臭くてエグくて、でも僕が大好きなマイカさんのザーメンの味がしてくる♥ スケベで、エッチで、興奮する味……♥

「……お……美味しい♥」

「え？」

「美味しいと思っちゃいけないのに、美味しい♥ マイカさんのザーメン料理美味しい♥」

「♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「んひい♥ ちょっと♥ おちんぽ♥ お尻の中で急に大きくなった♥」

「だってだって♥ 嬉しいんですもの♥ 子供の頃からの夢がかなったんだからあ〜♥♥」

「お……大げさだよお……♥」

オムレツの後は、サラダを食べてみる♥ 新鮮な風味が、ザーメンのどろっとした味で台無しになってる♥ ハンバーグもお肉はとっても美味しいのに、かかっているミルクと練り込まれたミルクが、美味しさの邪魔をしてくる♥
でも……夢中になって食べてしまう♥ おにぎりを頬張ると、どろどろのちんぽミルクと、お米の甘みが混ざって、最低の味……♥
でも、今の僕は、毎日マイカさんの精液飲んで生きてるから♥ 美味しく感じてしまう♥
頭の中までちんぽ汁漬けになっちゃったのかな……♥

「……ユ……ユナ君♥ 私我慢できなくなってきたわ♥」

「ふえ……♥ ……あ、セックスしたいんだ♥」

「え、ええ♥ うう……椅子にならなきゃいけないのに……ごはんの邪魔をしちゃいけないのに♥」

可愛らしく、うう……とうなりながら、必死に腰振りを我慢するマイカさん。

……そんな我慢しないでいいのに♥

……よし♥

「……えい♥」

「え、ひゃあああああ……♥♥♥」

僕が、腰を振り始めた♥ あ……おちんぽが入れたり抜けたりする感触……凄い良
い……♥

「だ……駄目よユナ君♥ テーブルマナーに反するわ♥ おほお♥ 駄目♥ 食事中

にお尻おすまんこセックスなんて駄目♥ 禁止よ禁止♥」

「料理にザーメンかけてる方がおかしいよ♥ ほら♥ ほら♥」

「んひいいい、いいい、いいい♥ ユナ君、正論言わないでえ〜♥」

マイカさんが腰を振り始める♥ こうなると、僕は何も出来ない♥

主導権はあつというまにマイカさんに握られて、僕は、女の子みたいに喘ぐ事しか出来なくなった♥

「ひゃん♥ ああん♥ お尻ズボズボ♥ きもちいいわ♥ もう射精ちゃう♥ 下の
お口にもザーメンご馳走しちゃう♥」

「ほ……僕も♥ えっちな料理食べてたから……もう駄目………♥♥♥」
「あああ♥ ああああ〜〜♥ おっへ♥ いぐ……♥ いぐううううううう♥」



マイカさんの精液は僕のお尻の中に、僕の精液は食べてる途中の弁当箱にいっぱいぶっかけられた♥ 種付けされた精液を、お腹で感じながら、もっとどろどろになっ
てしまった、食べかけのお弁当を見る。

「……ユナ君♥ 今度は、一緒に食べましょう♥ 二人のラブラブザーメンで出来た
お弁当♥」

言ってる事はとってもおかしい。だけど、僕は、マイカさんの提案を、

「う、うん♥」

当然のように、受け入れちゃった♥

第五話 女装メイドとふたなりお嬢様♥

「ごめんなさい、今日体調悪くて学校いけないわ」

登校中に、マイカさんから届いたチャットを見て、僕は慌てて返信した。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。今日相手できないかわりに、おちんぼの画像送るわね」
「え？」

次の瞬間、パジャマ姿で、笑顔でピースしながら、おちんぼごと写した自撮画像が出てきたので、僕は慌ててスマホを隠した。誰にも見られないよう、壁を背にしなから、スマホを操作する。

「ちょっと、何考えてるのマイカさん！ 僕登校中なんだけど！」

「一日中ユナ君が、私のちんぽ想像してくれたら嬉しいもの♥」

「最低……」

「え、ちょっとごめん、許して〜！」

かわいい動物のスタンプで謝ってくるけど、それに紛れて、オチンポやキンタマの写真も流れてくるから、僕は困ってしまった。

……何が困るって、こんなえっちなふたなりちんぽ写メ送られてきたら、授業中でも、我慢するのが辛い♥

そして学校が終わった時。

(……お見舞いついでに、会いにいかうかなあ)

体調次第では、今日もマイカさんにお尻レイプしてもらおう。お尻の穴をうずうずさせながら、僕は、マイカさんが住むお屋敷へ向かった。



「うわ、でっかい……」

お屋敷はまさに、絵に描いたようなお金持ちの家だった。住所は前聞いた事あったけど、来るのは初めてだ。インターホンを鳴らすと、大きな門が開いた。お邪魔します、と声をあげて中に入ったら、

「いらっしやいませ、葉月ユナ様」

「えー？」

そこには、長身のポニーテールのメイドさんが居た。

すごいキレイ……、中性的でモデルみたいなスラっとした体型だ。声もハスキーでなんか口な感じ……。

「あの、どうして僕の名前を……」

「マイカ様から毎日の様に、お話を聞かせてもらってますので。今日は、お見舞いにいらしたんですね」

「は、はい。マイカさん大丈夫ですか？」

ワンチャンスあれば、オチンポもしゃぶらせてもらおうと思っただけでとまでは、流石に言えない。

メイドさんは僕ににこりと笑った。そして、口を開いてこう言った。

「それでは、先にこちらをお召しになっただけですか？」

「……え」



「こ、こんな格好で……」

綺麗なメイドさんは僕にお着替えさせた後、とても良くお似合いですって微笑んでから、そのままどこか言ってしまった。

この格好、なんといっても、足がスースーする。

マイカさん達っていつもこんな、不安な気持ちで過ごしてるの……？ そ、それと

も、慣れるものなのかな？

……この格好、マイカさん、かわいいって言ってくれるかな？
期待や不安で胸をドキドキさせたまま、僕は、マイカさんの部屋のドアをノックした。

「マ、マイカさん、居るかな？」

「え、ユナ君!？」

扉の向こうから聞こえてくる声に、ドキつとするけど、すぐに、嬉しい気持ちがいっぱい、胸にひろがる。

「居るわよもちろん！ お見舞いに来てくれたんだ、さあ、入って入って♥」

入室を促す声に、僕は生唾をゴクリと飲んだ後、思いっきりドアを開けた。

「し、失礼します……」

「……え」

マイカさんが固まっている。それは当然だと思う。
だ、だって今の僕、メイドの格好してるから……♥

「……や、やだ、やっぱり恥ずかしい。このメイド服、スカートも短いし、それにシヨーツもスケスケで口だし、お尻は丸出しだし！」

「な、なんでユナ君、そんな格好を……」

女装なんて初めて、でも、思ったより癖になっちゃいそう……。顔を真っ赤にしなから、ベッドに座るマイカさんの所へ近づいていく。

「なんでって……マイカさんが絶対喜んでくれるって言われたから……」

「言われたって……誰に……」

その質問に答える余裕がない、僕はスカートの裾をもって持ち上げた。シヨーツに包まれた僕の童貞ちんぽを、マイカさんに見てもらおう。

「ご……ご奉仕させていただきます……マイカお嬢様……」

そして、後ろを振り返って、お尻の部分がくり抜かれて、丸出しになってるお尻を見せて、

「男の娘メイドの女装オマンコで……いっぱいご奉仕させてください……！」

その言葉を言った瞬間、お尻にぬるっとした感触が走った！♥

「ひゃあ！♥」

マ、マイカさん、僕のおしりおまんこにしゃぶりついちゃってる！？♥ ひゃ、ひゃ、だめだよこんなの……♥ アナル舐められるのなんて初めて……！♥

「汚い！ 汚いよマイカさん！♥」

「ユナ君に汚い所なんかないわよ♥ 好き♥ 男の娘のおまんこの味大好き♥」

舌をいれられたら、きゅっと、僕の肛門が勝手にマイカさんの舌をしめつけちゃう♥ するとマイカさんは、舌を僕の恥ずかしい縦割れの筋にそって上下に動かしてる♥

「あ、ふにゃあああああ~~~~ん♥♥♥♥♥」

猫みたいな変な声あげちゃう♥ 後ろのマイカさんが、音をたてて僕の肛門を舐め回す♥

♡♡♡♡♡

「だ、駄目だよマイカしゃあん♥」

「マイカさんじゃなくて、ご主人様でしょ♥」

「ご、ご主人様♥ マイカお嬢様♥ もう許してくださいさ〜い♥」
「だ〜め♥」

後ろからお尻を舐められるだけで、頭が沸騰しそうになる♥ こんなしつこくねちつこく、お尻の穴を舌でほじほじされたら、どんな男の子だって女の子になっちゃう♥

し、幸せすぎて蕩けちゃいそう……♥

口をちゅぽんと離すと、僕は幸せな気分のまま、おっぱいを潰しながら抱きついちゃう♥

「ぼ、僕が好きなのはご主人様、マイカさんだけです。じよ、冗談でも、他の人のちゅぽの事なんか話に出さないでください♥」

「ひゃあ、ユナくん♥」

恥ずかしいセリフを言った僕を、マイカさんは抱きしめてくれた。恋人同士の甘い時間……。

……でもその間も、お互いのちゅぽが擦れ合っちゃう♥ すぐにお互い、だらしないアへ顔になった♥

「ユ……ユナくん、私、メイドさんの女装マンコにおチンポねじこみたいの♥」

「僕も……ご主人様のおちゅぽ欲しいです……♥」

マイカさんが仰向けに寝転がった♥ 僕は一度立ち上がって、エロ蹲踞の姿勢でマイカさんのチンポに座り込むように、アナルにチンポの先をあてがった♥ みせちゃいけないだらしない顔を、マイカさんに見て貰いながら僕は、不意打ち気味に腰を下ろした♥

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽ♥

「んひいいいいいい♥ 予告なくチンポ挿入は禁止よお〜♥ ゆっくり入っていきう♥ オスマンコ肉がねっとり病み上がりチンポに絡んでくる〜♥♥♥♥」
「あ、あ、しゅき♥ ちんぽ入ってくる♥ ちんぽしゅき♥ ご主人様〜♥」



コスプレって凄い♥ 着替えたただけなのに完全にエッチなメイドさんになりきっちゃう♥♥ マイカさんのふたなりチンポを、ご主人様のもととしてゆっくりくわえ込んでいく♥ 根元まで飲み込むのに、ゆっくり時間を、十秒くらいたつぷりかけちゃう♥
「ご、ご主人様、オスマイドのアナルせんずりで、ご奉仕させていただきます♥」
「ア……アナルせんずりって何い……♥ どこで覚えたのそんな言葉あ……♥」

その質問には恥ずかしくて答えられなくて、そのまま腰をゆすり始める♥
あ、ああやっぱりお尻好き♥ 深い所突かれるのもいいけど、浅いところ、前立腺をすりすりするの癖になる♥ 舌出してスケベに感じちゃう♥

メ、メイドになりたいよお♥ マイカお嬢様に一生オナホご奉仕したいのお♥

「しゅ……しゅごいわこのメイドオナホ……♥ 何もなくても、おチンポをケツ穴でズリズリ扱いてくれる♥ 優秀♥ 優秀すぎるオスマンコメイド♥ お給金上げちゃう♥ ケツマンコメイド長に抜擢しちゃうわ♥」

「お、お気に入りにただけて、光栄です♥♥♥」

マイカさんはおつきなおっぱいを、手で左右にわけて、僕の股間の様子を見ってくる

♥
僕のチンポはご主人様の上で、上下左右にえっちに揺れちゃってる、マイカさんはそれを食い入るように見ながら、腰を動かしてくる♥ み、見られるの好き……もつとえっちに乱れたくなっちゃう……♥

「ご、ご主人様、僕のお尻マンコ気持ちいいですか♥」

「最高♥ 最高よ♥ メイドアナルが私のおチンポをしっかり扱いてくれるの♥ それに、顔がとつてもかわいい♥ チンポに駄目になってるスケベな顔♥」

「は……恥ずかしい……♥」

本当死んじやうくらい恥ずかしいけど、腰を振るのはやめられない僕♥ メイドになりきつての変態逆アナルセックス♥

僕達の限界は、直ぐだった♥

「だ、出すわよ♥ メイドにっ♥ ほら、しっかりケツ締めて、ご主人様のザーメンお尻でゴクゴク飲みなさいっ♥」

「くださいっ♥ くださいっ♥ ご主人様の高貴な金玉ミルクで、メイドの男の娘マンコ妊娠させてくださいっ♥」

「射精す♥ 射精すわっ♥ あ……んおひよおおお♥♥♥」

「ひゃあああああん……っっっ♥♥♥」

全身を震わせながら、騎乗位の僕の体が、一瞬浮き上がるくらいの量の精液を、思いつきりぶちまけてもらいながら、僕もメイドちゃんぽから射精しちゃう♥ お尻の穴をきゅんきゅん締め付けながら、僕も射精して、マイカさんの顔とおっぱいをドロドロにした♥



ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥
ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥ぐわんぐわん♥

「……ち、ちなみになんだけど、ユナ君は私のおちんぽ一筋っていつも言ってくるけど、お母様のはダメ？」

「な、何言ってるの!?!」

「お父様も交えて、親子ふたなり逆アナルセックスとかしてみたいかなあって……」

「そ、それは……」

「だめ……?」

「ええつと、ええつと……」

体験版はここまで
続きは本編で♥